

アンコール遺跡観光（1999年-2020年）と カンボジアにおける新型コロナウイルス

上智大学アジア人材養成研究センター特任助教
三輪 悟

1. はじめに

アンコール遺跡群はカンボジア北西部のシェムリアップ州にある9～15世紀のアンコール時代に建築された石造の宗教建造物群である。遺跡群はフランス植民地時代を経て、内戦後の1992年に世界文化遺産に登録された。世界の文化遺産観光地の中でもとくに人気の高い観光地¹⁾として知られる。1990年代より順調に観光客数を伸ばし続け、2018年には260万人²⁾の外国人が遺跡チケットを購入してアンコール遺跡群を見学し、2019年には660万人³⁾を超える外国人がカンボジアを訪問した。

筆者は上智大学アンコール遺跡国際調査団の一員⁴⁾として、1997年10月に初めてカンボジアのアンコール・ワットを訪れ、1999年から現在まで現地駐在員として現地の様子を継続的に観察してきた。この間チケットの販売管轄権が2度移譲され、チケット販売ブースは2度場所が変わった。訪問者の国籍の内訳も大きく変容を遂げている。

2020年1月末以降、アンコール遺跡観光は新型コロナウイルスの影響を大きく受けた。3月にアンコールを訪れる外国人は過去四半世紀に未経験の歴史的な激減を示した。同年4月よりカンボジア人の若者が自転車に乗りエクササイズの間としてアンコール遺跡群を利用し始めた。現地人の若い女性がマウンテンバイクで遺跡地域を走る姿は新しいアンコール観光の姿である。そこで、これまでの観光動向やチケットの販売システムの変化と経過を整理し、過去20年間の外国人旅行者の観光の傾向を整理考察するとともに、今般の新型コロナウイルスによる観光客激減時に観察された状況について、さらには新たな動向についてもまとめておきたい。2020年3～8月まで研究者が実質的に入国できない空白の半年間の記録⁵⁾をしっかりと残す意義は大きい。

2. 統計に見るアンコール遺跡観光の規模と変化

2-1. 外国人入国者数の推移

外国人のカンボジアへの入国者数については1993年以降については、観光省発表の年間統計⁶⁾（図1と図2）が有益である。1993年から2019年までの27年間において前年比で減少したのは二度だけである。一度目は1997年で、同年7月5日にプノンペンで武力衝突が起きたことが大きく影響した。二度目は2003年でSARS（重症急性呼吸器症候群）が世界的に流行し風評被害などが影響した。その後2005年頃にアジアで流行した鳥インフルエンザによる影響はあったと考えられるが統計上前年を割ることはなかった。2020年は今般の新型コロナウイルスの影響により2003年に次ぐ三度目の減少となる見込みである。

年	人数(人)	前年比(%)	年	人数(人)	前年比(%)	年	人数(人)	前年比(%)
-	-	-	2001	604,919	130%	2011	2,881,862	115%
-	-	-	2002	786,524	130%	2012	3,584,307	124%
1993	118,183	-	2003	701,014	89%	2013	4,210,165	117%
1994	176,617	149%	2004	1,055,202	151%	2014	4,502,775	107%
1995	219,680	124%	2005	1,421,615	135%	2015	4,775,231	106%
1996	260,489	119%	2006	1,700,041	120%	2016	5,011,712	105%
1997	218,843	84%	2007	2,015,128	119%	2017	5,602,157	112%
1998	286,524	131%	2008	2,125,465	105%	2018	6,201,077	111%
1999	367,743	128%	2009	2,161,577	102%	2019	6,610,592	107%
2000	466,365	127%	2010	2,508,289	116%	2020	-	-

図1 カンボジア入国者数（外国人）の推移（観光省2020）

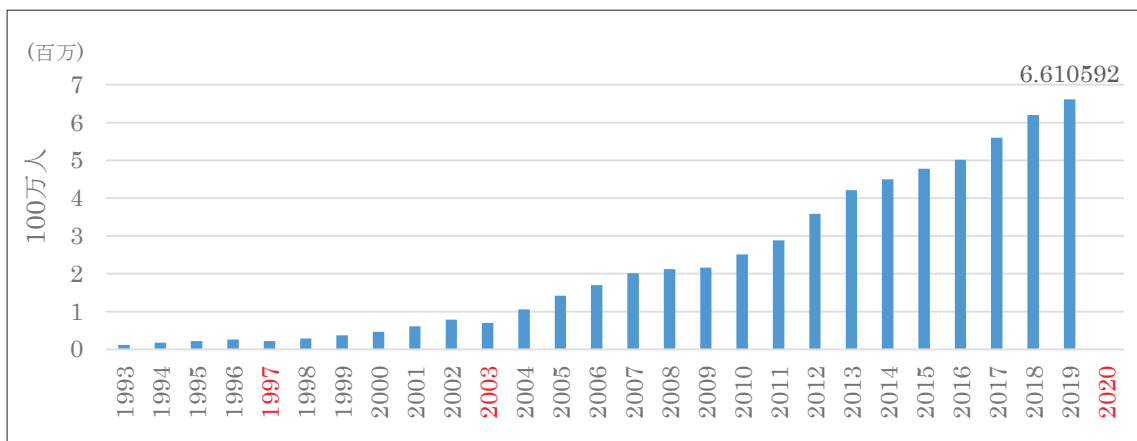


図2 カンボジア入国者数（外国人）の推移（観光省2020統計を基に筆者作成）

年毎の国籍別内訳をみると、国籍別統計が確認できる1999年以降では、1999～2001年まではアメリカ人がシェアのトップであり、2002～2003年は日本人、2004～2008年は韓国人、2009～2016年まではベトナム人、2017～2019年は中国人がそれぞれトップとなっている。1999～2019年までの21年間に於いて常にトップ10にとどまった国は、アメリカ、日本、中国、フランスの4カ国だけである。以下、各国ごとに記す。

a) アメリカ人（図3）

アメリカ人は、統計のある1999年から2001年までは国籍別シェアはトップであった。その後も常にトップ10に入り続け、安定した成長を見せてきた。2017年にはピークとなり、26万人が訪れ5%のシェアを占めた。その後若干の減少に転じている。

b) フランス人（図4）

フランスは、旧宗主国であり過去20年間非常に安定した成長を示している。2018年にピークとなり17万人が訪れシェアは3%であり、翌2019年には減少している。

c) 日本人（図5）

日本人は、2001年から2002年にかけて5.4倍という猛烈な伸びを見せ、2002～2003年の2年間

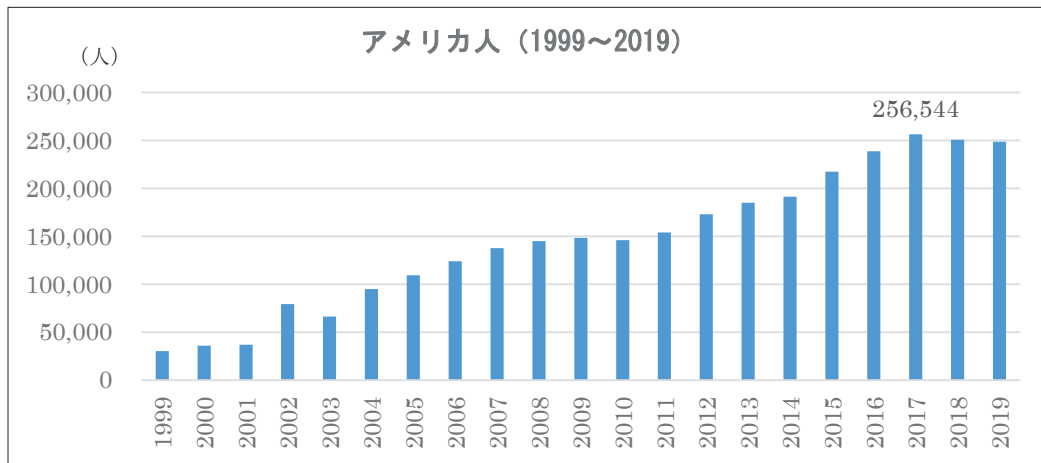


図3 アメリカ人のカンボジア入国者数 (観光省2020)

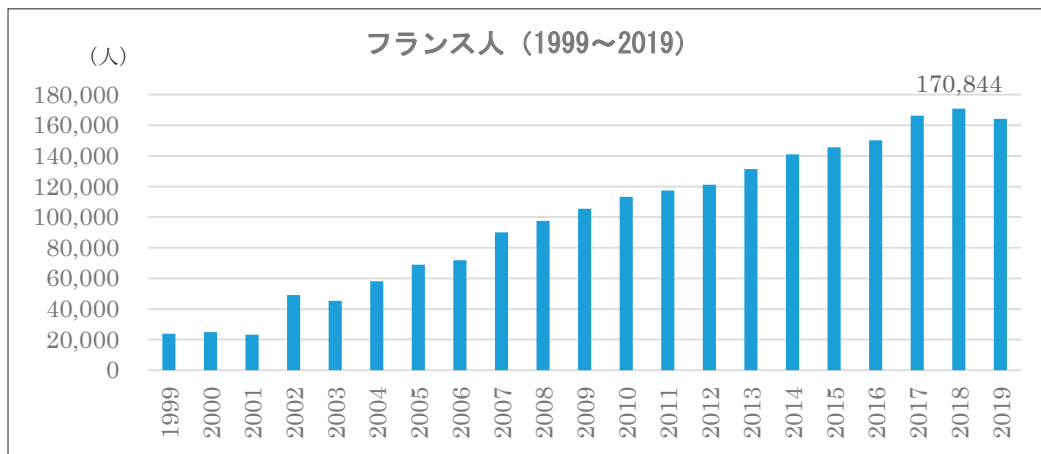


図4 フランス人のカンボジア入国者数 (観光省2020)

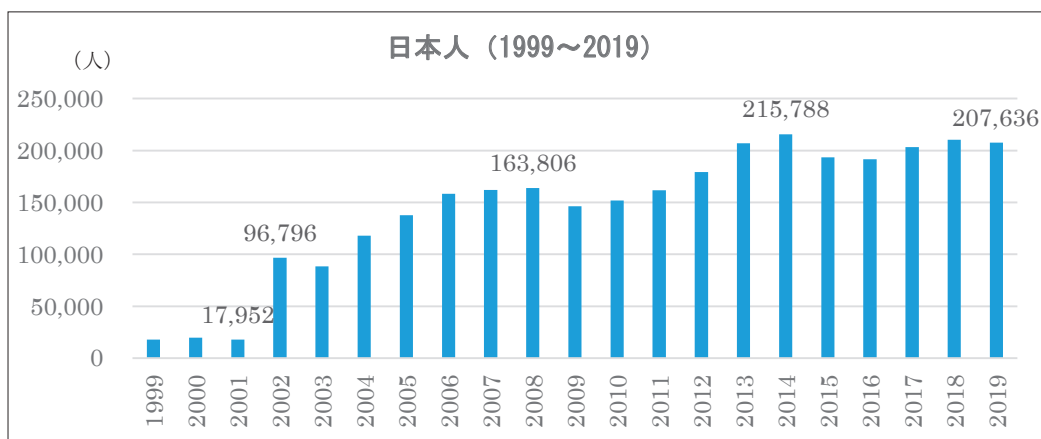


図5 日本人のカンボジア入国者数 (観光省2020)

は国籍別のトップに躍り出た⁷⁾。常識的にはにわかに信じがたい伸びではあるが、ここでは統計を基に記す。2002年に急伸した背景は何であったのかよくわからない。その後2004年以降大きく伸びたものの韓国人に越された。2013年以降はほぼ横ばいが続くが、ピークは2014年の22万人であった。2019年は21万人が訪問し国別のシェアは3%であり、順位は7位である。2018年に21万

人を越えたものの、翌2019年には再度減少している。

d) 韓国人 (図6)

韓国人は1997年のアジア通貨危機の影響を大きく受けた。筆者が1997年10月に初めてカンボジアを訪れた後、一時期韓国人が目に見えて減った時期があったことを記憶している。しかしながらその後2002年以降急成長を見せ、2004年には日本を抜き、同年より2008年までのシェアはトップであった。これに伴いシェムリアップ市内には韓国料理店が急増した。2006年11月にはアンコール-慶州世界文化エキスポ⁸⁾ (写真1) がシェムリアップで開催され、開催跡地は「キョンジュ (=慶州)」と呼ばれ現在に至る。2009年にはトップの座をベトナムに譲った。2000年代の後半にはカンボジアへの投資が急増し、アンコール観光においても首位を得たことから「韓国ブーム」を感じさせた。一時期大韓航空とアジアナ航空がシェムリアップに直行便を飛ばしたことがそれをよく示している。筆者は2009年から2013年にかけてはベトナム航空やタイ航空に比し相対的に安い運賃設定があったことから、シェムリアップから東京への一時帰国の際にソウル (インチョン) 経由便を利用した。2016年末に大韓航空は今後の需要増が見込めないことから、ソウル-シェムリアップ間の直行便の運航を停止した。その後も新型コロナウイルスとは無関係に運航していない。

一時期とはいえ日本人の2倍以上の渡航者がいた韓国人であるが、2019年の時点では約1.2倍と僅差で韓国人が多くなっている。韓国の人口は約5,100万人であり、日本の人口1億2,600万人の半数にも満たない。この人口の差を踏まえるといかに韓国人がカンボジアに大挙して訪れていたかが分かる。その背景については筆者は十分に理解していないが、韓国において何らかアンコールブームがあったことは確かと考えられる。図6中の1999年から2001年までは統計の欠如で人数を示していない。

e) ベトナム人 (図7)

2007年10月5日にカンボジア、ラオス、ベトナム3カ国間の観光大臣が共同宣言⁹⁾ に署名した。その後、2008年12月5日よりカンボジア-ベトナム2国間のビザ免除協定¹⁰⁾ の発効を契機として、2009年以降急増を続け、2009~2016年までの8年間は国籍別シェアのトップであり続けた。2015年の99万人をピークとしその後減少に転じている。2017年にはトップの座を中国人に譲った。入国者の中の何割がアンコール遺跡観光を行ったかは統計の不足により検証できない。ただし当時「ホーチミンからバス (写真2) でカンボジアに入国し、プノンペン市内を経由せずシェムリアップに直行する」事例が多くあった。実際シェムリアップ市内にベトナム語のプレートを付けたバスが何台も並んでいたことを覚えている。

統計のある2016年は入国者のうちベトナム人が第1位 (96万人) であったが、遺跡チケットの購入数はシェア3%で11位 (7万人) であった。つまり入国数の内7%しかアンコール遺跡を見していない計算となる。図7中の1999年から2002年までは統計の欠如で人数を示していない。

f) 中国人 (図8)

中国人は、2010年にはベトナム人 (47万人)、韓国人 (29万人) に次ぐ3位 (18万人) であっ

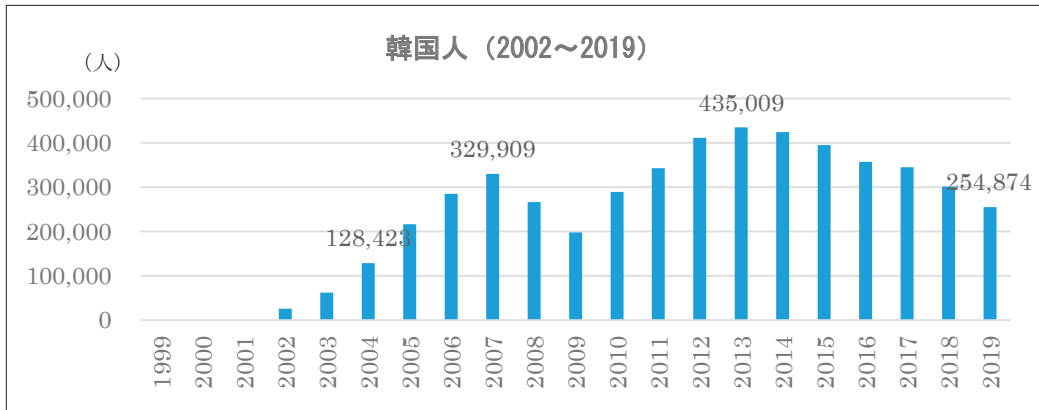


図6 韓国人のカンボジア入国者数（観光省2020）

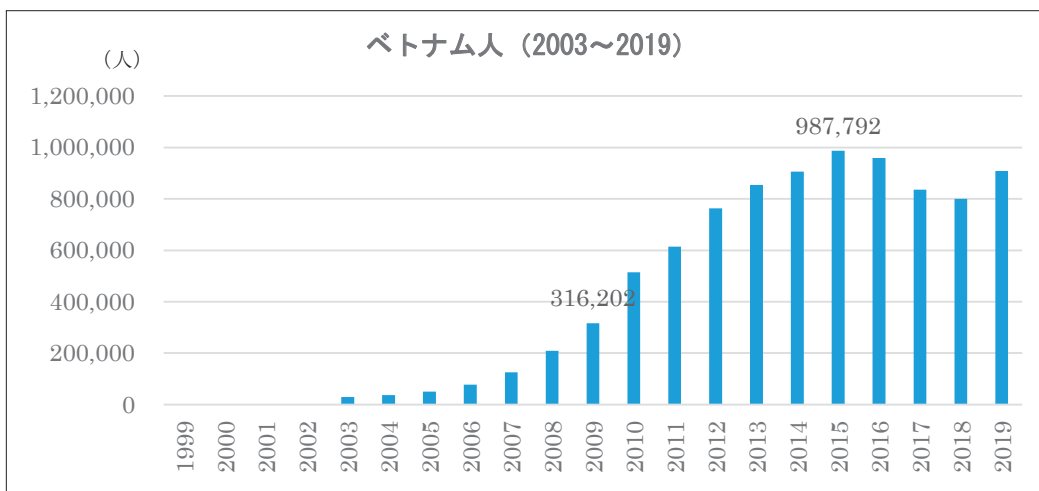


図7 ベトナム人のカンボジア入国者数（観光省2020）

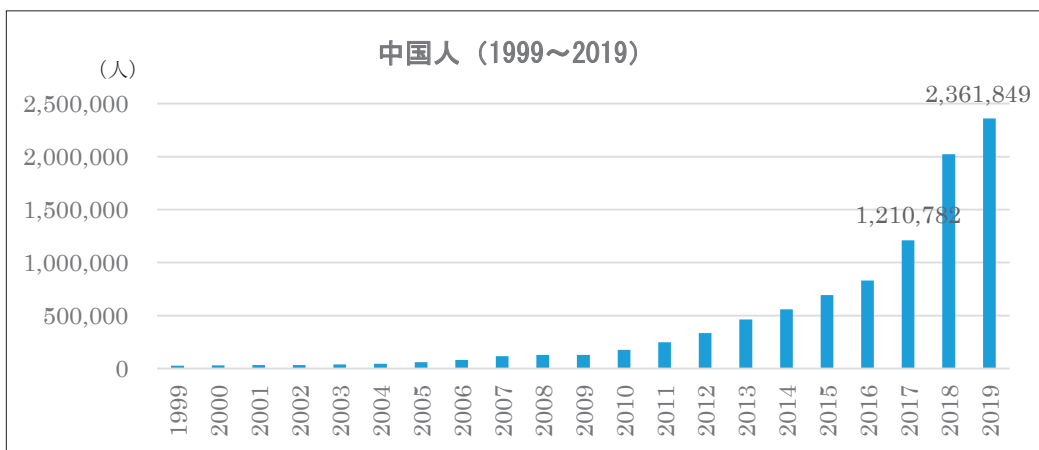


図8 中国人のカンボジア入国者数（観光省2020）

だが、その後6年間安定した伸びを見せた。2017年には前年比46%増という驚異の伸びを示し、同年初めて1カ国からの入国者数が100万人を超えて、121万人がカンボジアを訪れた。2017～2019年は国別シェアでトップとなった。2019年には236万人に達し36%のシェアとなった。人口1,600万人のカンボジアに対して200万人超の中国人が訪問するというインパクトの大きさは想像

に余りある。近年の伸びだけが注目されるが、実は統計のある1999年以降常にトップ10に入り続けている4カ国の一つである。

中国は2013年に習近平主席が国策として「一帯一路」政策を打ち出し、カンボジアにおいても水力発電所¹¹⁾の建設や高速道路¹²⁾の建設などが進んでいる。首都プノンペンの市内には中国資本による超高層ビル（写真3）が林立し首都の景観を変えつつある。沿岸部の町シアヌークヴィル¹³⁾はここ数年における中国資本による開発で町の姿を一変させた（写真4）。シアヌークヴィルへの中国人の移住者の数は8万人を超えるとの統計もあり、都市人口の半数に相当し、国内でも特殊で異質な街に変容した。フンセン首相は2019年8月に「オンラインギャンブル禁止」の方針を打ち出し、これを受け一時的に多くの中国人が国外へ脱出した。

g) タイ人（図9）

タイは国境を接する隣国であり、90年代より一定数の入国者数を継続している。

ここ数年あまりは両国間の関係が比較的安定していることも手伝い、タイからの入国者数は大幅に増加している。

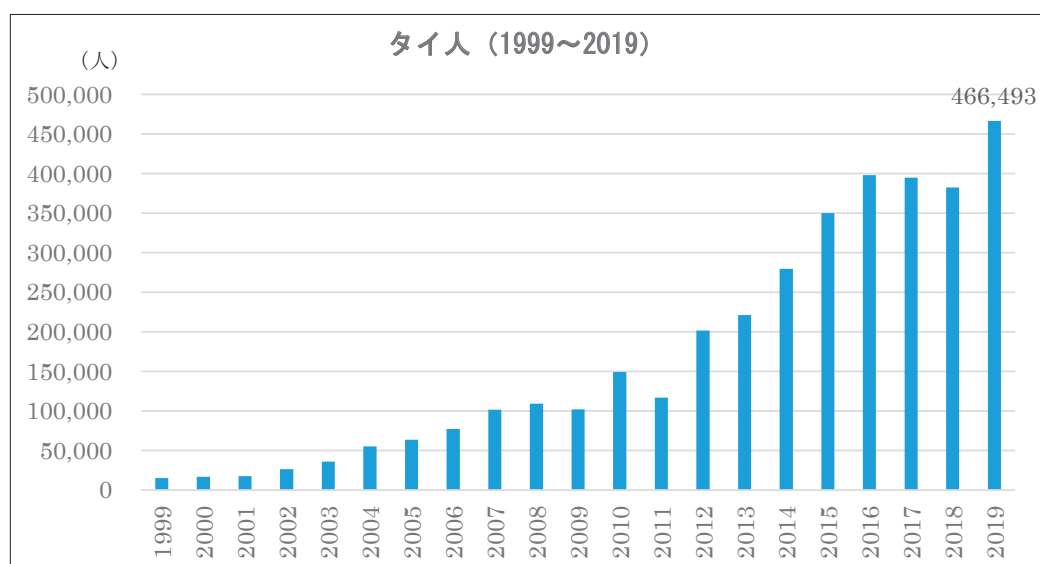


図9 タイ人のカンボジア入国者数（観光省2020）

h) ラオス人（図10）

ラオスからの入国者は2007年から急激に増えたことがわかる。2009年に初めて入国者数のトップ10入りし、2014年には中国人、韓国人に次ぐ3位となり10%のシェアを占めるまでになった。2019年の時点でもタイ人に追い越され4位となったがシェアは6%を占めている。

なお2019年の国籍別の入国者数の上位10カ国を前年のデータ添えて示したものが図11である。

第1位は中国、2位はベトナム、3位はタイ、4位はラオス、5位は韓国、6位はアメリカ、7位は日本、8位はマレーシア、9位はフランス、10位はイギリスという順である。第1位の中国が全体の36%のシェアを占め圧倒的多数となっている。中国と第2位のベトナムの2カ国だけ

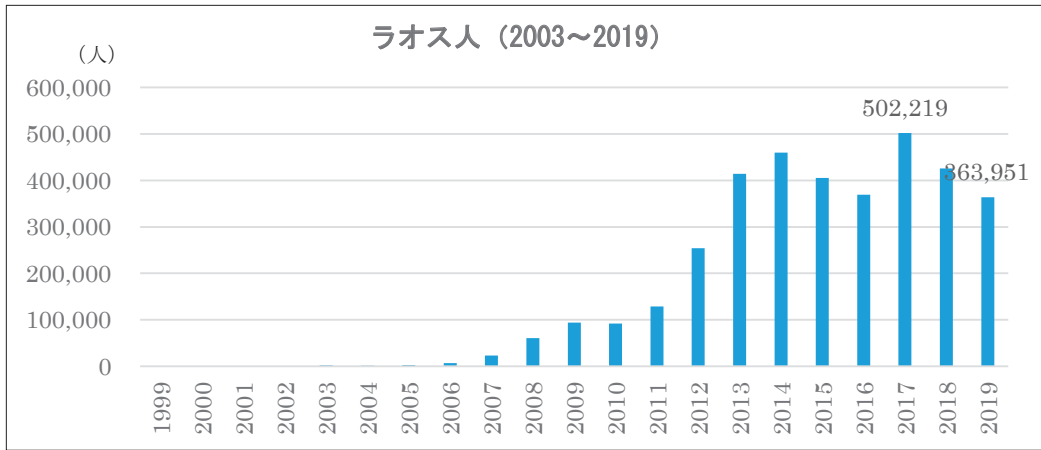


図10 ラオス人のカンボジア入国者数 (観光省2020)

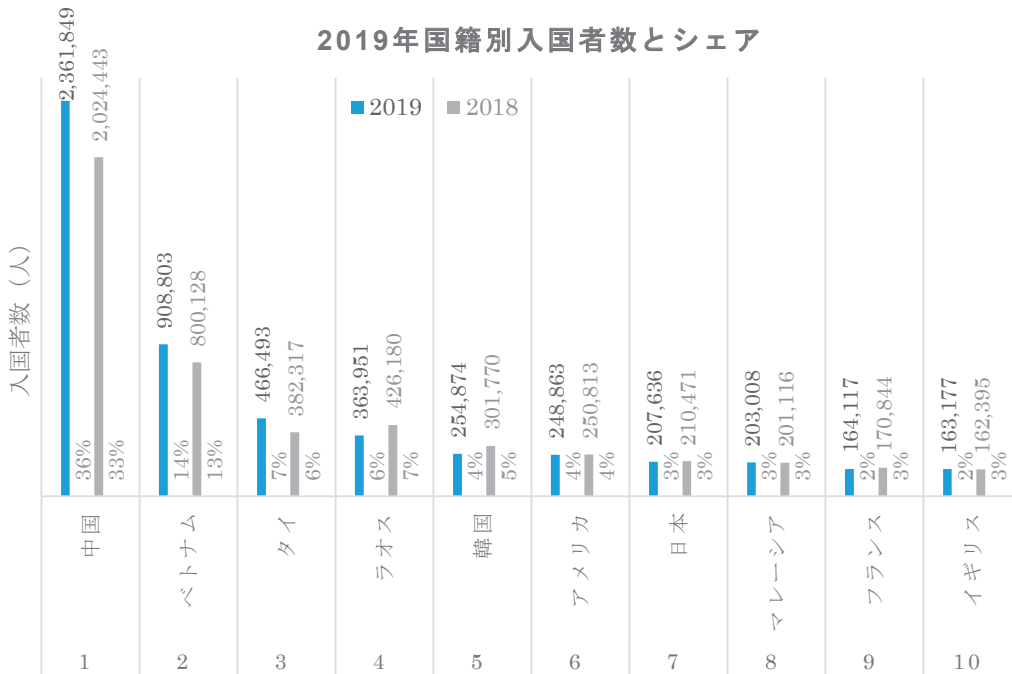


図11 2019年国籍別入国者数 (観光省2020)

で全体の50%を占める。過去数年間における中国人の急増でこれまでのバランスが大きく変わりつつある。第2~4位を、カンボジアと国境を接するベトナム、タイ、ラオスが占めるようになってきたことは、地域社会経済の発展を示すと考えられる。

以上は、観光省のカンボジア入国者統計であり、シェムリアップやアンコール遺跡群を訪れる観光客数を直接的に示すものではない。またカンボジア国内に確かにいるはずである北朝鮮国籍者の記載が見られないことから、外交官は網羅していない。入国者数と遺跡チケット購入者数の間にはある程度一定の相関関係が見られ、入国者数を把握することで、アンコール遺跡訪問者数を予測できる指標になりうることを以降の項で示す。

2-2. アンコール遺跡チケットの販売

遺跡チケットの販売統計は、2010年から2015年までの分はアプサラ機構がウェブに公表するもの、2016年以降から2020年7月までの分はアンコールエンタープライズが公表する詳細なデータを基として独自に集計を行った。2010年から2019年までの10年間を平均すると、入国者のうち、約45%がチケットを購入しているという計算となる。ただし2019年の割合は33%と減少しており、アンコール観光目的以外の入国者が増えていることがうかがえる（図12・13）。入国者数の伸びがアンコール観光の収益増加には必ずしも繋がっていないのである。あるいは観光で訪れる目的地がアンコール遺跡群以外に分散化が進み多様化していると解釈することも可能である。

2019年の年間統計によると、国籍別のチケット購入者数は図14のとおりである。第1位の中国人が全体の40%のシェアを占め、第2位のアメリカ人は7%であり、圧倒的多数といえる。

また、チケット購入者数と売り上げの関係（図15）を見ると、2017年に売り上げが急上昇するが、これはチケット料金の値上げが大きな要因である。値上げの内容は後に述べる。購入者数、売り上げともに2018年をピークとして2019年には前年比15%減となっている。この理由については、チケットの値上げが一要因かもしれないし、中国人の増加による観光地としての価値が下がった面も否定できない。訪問希望者が一巡し、リピーターになっていないともいえるかもしれない

年	入国者数 (人)	購入者数 (人)	購入者／入国者 の割合(%)	購入者数の前年比 (%)	売り上げ (US\$)	売り上げの前年比 (%)
2010	2,508,289	1,155,055	46%	-	33,113,500	-
2011	2,881,862	1,442,611	50%	125%	42,185,300	127%
2012	3,584,307	1,808,623	50%	125%	51,319,180	122%
2013	4,210,165	2,021,715	48%	112%	57,687,680	112%
2014	4,502,775	2,350,937	52%	116%	59,342,000	103%
2015	4,775,231	2,100,018	44%	89%	60,053,700	101%
2016	5,011,712	2,197,254	44%	105%	62,582,200	104%
2017	5,602,157	2,457,023	44%	112%	107,976,439	173%
2018	6,201,077	2,590,815	42%	105%	116,646,685	108%
2019	6,610,592	2,205,697	33%	85%	98,988,894	85%

図12 入国者数とチケット購入者数、同売上（2010-2019）

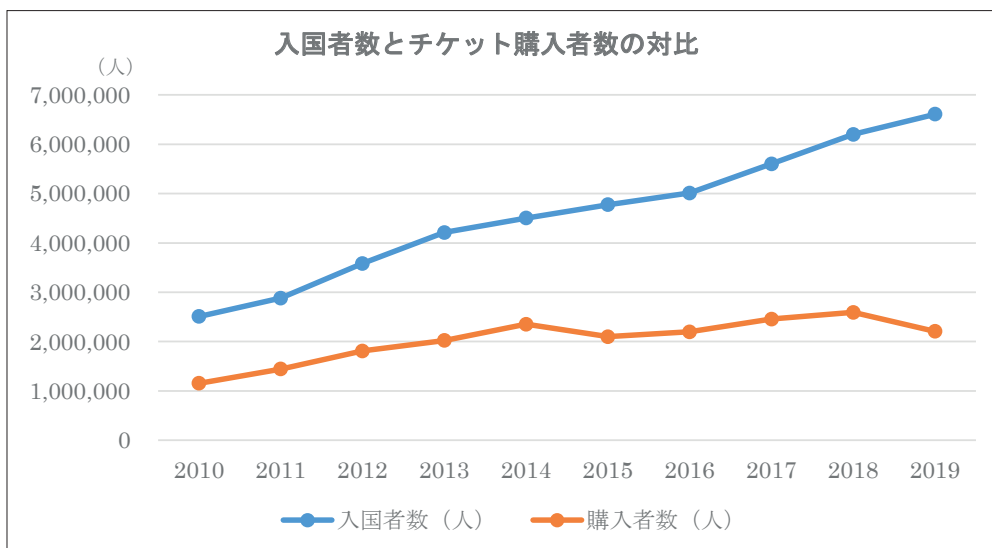


図13 入国者数とチケット購入者数

2019年の国籍別チケット購入者数（順位）

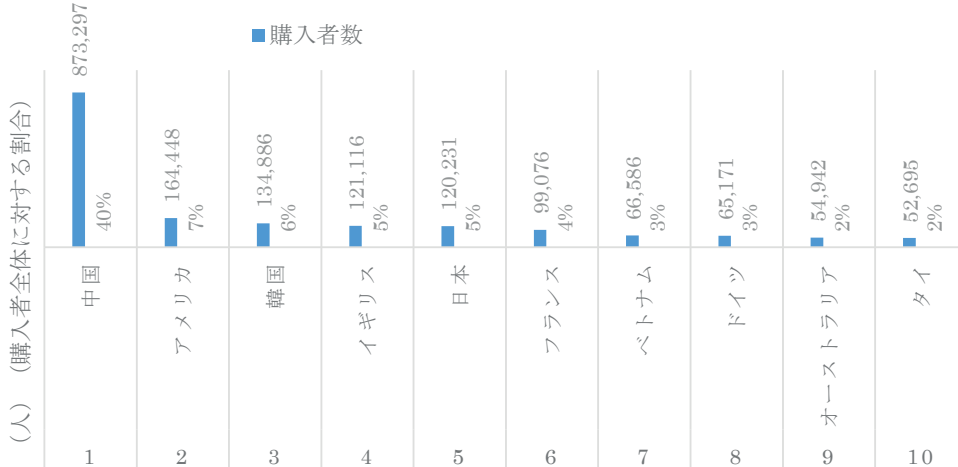


図14 2019年の国別チケット購入者数とその割合

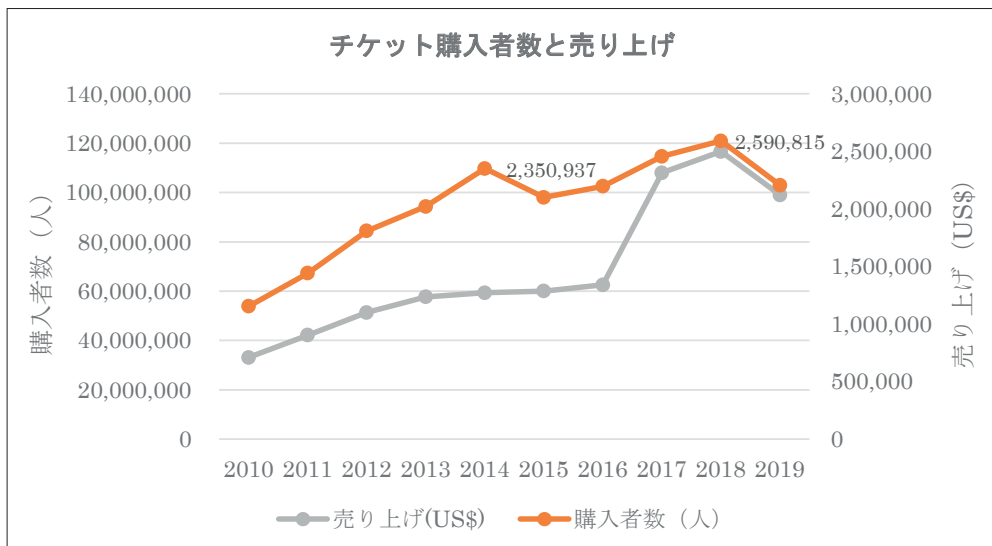


図15 チケット購入者数と売り上げの相関関係

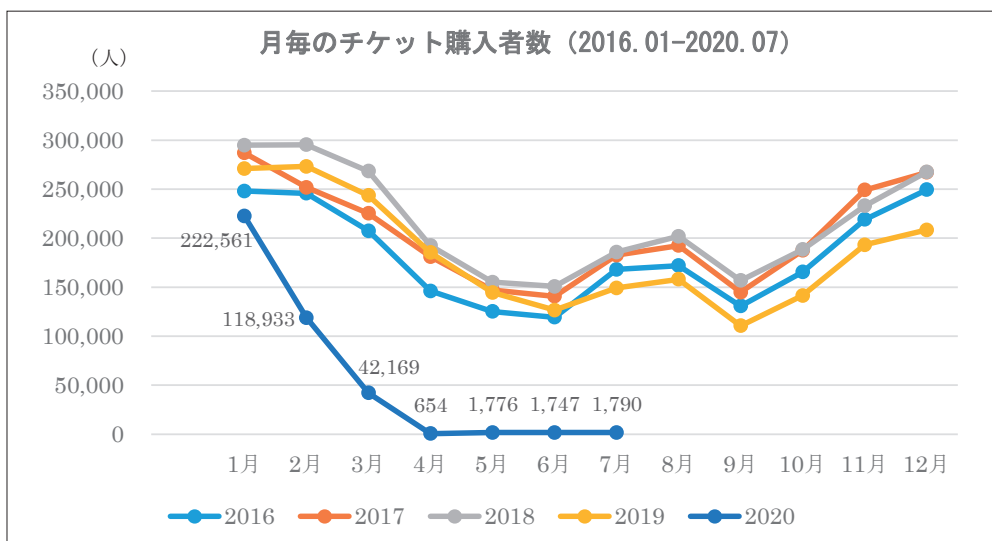


図16 過去5年間の毎月のチケット購入者数

い。後の項で述べるが2020年の新型コロナウイルスの影響は一連の流れの中で起きており、観光客の減少をすべて新型コロナウイルスに起因すると結論付けるのは誤りであることをあらかじめ指摘しておく。

チケット統計の年間の変化を見ると、4～9月までの閑散期と10～3月までの繁忙期に大きく二分できる。閑散期においても7～8月には一時的に数が伸びる。繁忙期ではとくに12～2月に最大を迎える傾向が顕著である。図16を見ると新型コロナウイルスの影響でチケット購入者が激減する様子がよくわかる。新型コロナウイルスの影響は1月末から見られ、2月、3月と減り続け3月末に底をつき99%減の状態となり、4月以降はほぼ99%減のまま7月まで変わっていない。

2-3. アンコール遺跡チケットの販売組織

ここで一度遺跡チケットの販売組織について振り返ってみたい。1999年4月以前のアンコール遺跡チケット（写真9A）販売は、観光省が行っていた。販売所は町からアンコール・ワットへ向かう道路沿いの小さな小屋（写真5）であり、販売とチェックの双方を一カ所で行っていた。その後1999年5月より、遺跡チケットの販売管理はソカ・ホテル¹⁴⁾が行うことになった。新しい券売所（写真6）がアンコール・ワットへ向かう道路沿い、旧券売所の少し南の保護ゾーン内に位置する場所に新規に建設された。チケット料金は、1日20ドルであった。後に3日券（40ドル）、7日券（60ドル）という仕組みが追加された。

2016年1月1日より、それまで17年間続いたソカ・ホテルによるチケット（写真9B）販売が終わり、カンボジア政府アンコールエンタープライズ¹⁵⁾が業務を継承した。2016年4月7日から券売所が場所を変え、60m沿いのキョンジュ地区¹⁶⁾に新たに建設された大型施設（写真7、8）に移った。北朝鮮が建設したパノラマ博物館¹⁷⁾の前を車が通過する動線には不自然さが残るが、水面下での交渉で紆余曲折があったことを思わせる。

その後2017年2月1日より大幅な値上げ（写真9C）が行われ、90年代より20年以上変わっていなかった料金体系が大きく変化した。1日券（37ドル、85%上昇）、3日券（62ドル、55%上昇）、7日券（72ドル、20%上昇）となった。各券種共通で販売額の内2ドルはジャヤヴァルマン7世子供病院¹⁸⁾への強制寄付¹⁹⁾との設定も新たに加わった。

なお遺跡修復関係者には、無料で発行される遺跡入場パス（特別年間パス）がある（写真10）。

2-4. アンコール遺跡チケット購入者数の国籍別の動向

アンコール遺跡チケットの購入者数につき、2016年から2019年までの4年間の推移を、2019年の購入者数上位6カ国（中国、アメリカ、韓国、イギリス、日本、フランス）とカンボジアと国境を接するベトナム・タイ・ラオスについて国籍別に見てみたい。またその際同時に入国者数を盛り込んだ図表を作成し動向分析の指標にしたものが以下である。

a) 中国人（購入者数：1位、入国者数：1位）

中国人については、過去4年間の統計を見ると他国と比較して特異な傾向が読み取れる。入国者数は急激に増加し3倍近くとなった。一方でアンコール遺跡チケット購入者数は2018年の112万人をピークとして2019年には減少に転じ3割近く減っている。入国者数に対するチケット購入

者の割合は2016年の80%から減少を続け2019年には37%となった。旅行目的以外の入国者が急増していることが分かる。

年	2016	2017	2018	2019
入国(人)	830,003	1,210,782	2,024,443	2,361,849
チケット購入(人)	667,285	910,107	1,123,597	873,297
購入割合	80%	75%	56%	37%

図17

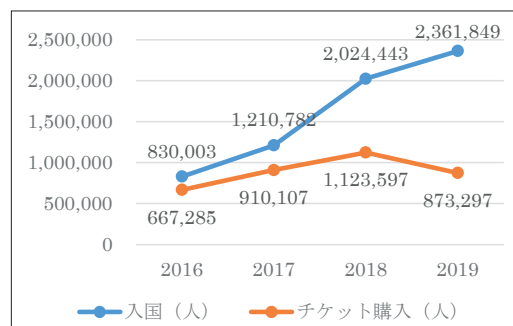


図18

b) アメリカ人 (購入者数：2位、入国者数：6位)

アメリカ人は入国者数とチケット購入者数の双方が非常に安定的である。

6割以上がアンコール観光をしている。

年	2016	2017	2018	2019
入国(人)	238,658	256,544	250,813	248,863
チケット購入(人)	154,691	155,414	166,974	164,448
購入割合	65%	61%	67%	66%

図19

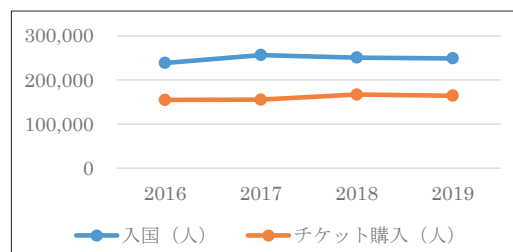


図20

c) 韓国人 (購入者数：3位、入国者数：5位)

韓国人は入国者数、チケット購入者数共に微減が続いている。

チケット購入者の割合は微減が続いているが、約6割がアンコール観光をしている。

年	2016	2017	2018	2019
入国(人)	357,194	345,081	301,770	254,874
チケット購入(人)	246,610	246,535	184,395	134,886
購入割合	69%	71%	61%	53%

図21

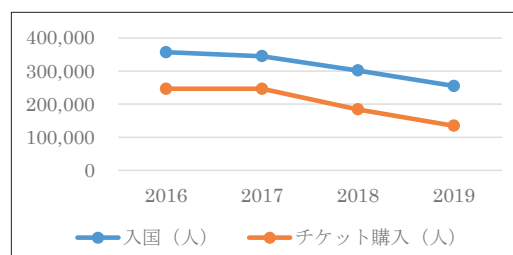


図22

d) イギリス人 (購入者数：4位、入国者数：10位)

イギリス人も非常に安定した傾向を示している。

年	2016	2017	2018	2019
入国(人)	159,489	171,162	162,395	163,177
チケット購入(人)	125,999	138,972	134,189	121,116
購入割合	79%	81%	83%	74%

図23

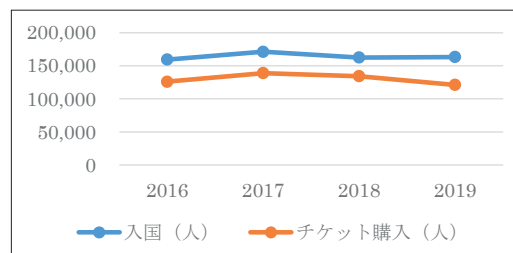


図24

約8割がアンコール観光をするという高い水準を保っている。

e) 日本人（購入者数：5位、入国者数：7位）

日本人も安定した傾向を示している。あえていうと、ここ数年における観光業界における日本人マーケットは伸び悩んでいる。チケット購入者の割合は微減傾向を示しており、観光目的以外のビジネス目的の入国者の割合が増えていることを統計（図25、26）が裏付けている。しかしなお6割の日本人がアンコール観光目的である。

年間を通じた日本人の統計（図27）を見ると、11月から3月までの乾季に多くが訪問する。4月は新年度が始まる季節であり、また現地の酷暑期でもあることから旅行を組みにくい事情があり減少する。5月から10月までの雨季は全体傾向としては減少するが、8月の夏休みに訪問者が一気に増える。また月ごとの統計には表現されないが、ゴールデンウィークなどの特殊な長期休暇にはイレギュラーに突出して訪問者が増えるのは例年の傾向といえる。

年	2016	2017	2018	2019
入国(人)	191,577	203,373	210,471	207,636
チケット購入(人)	125,410	124,550	120,072	120,231
購入割合	65%	61%	57%	58%

図25

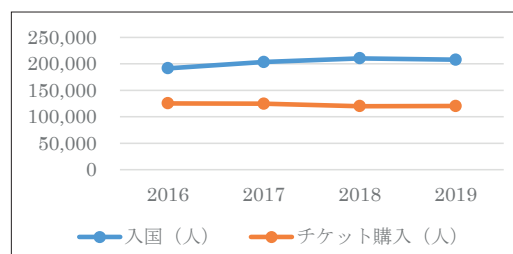


図26

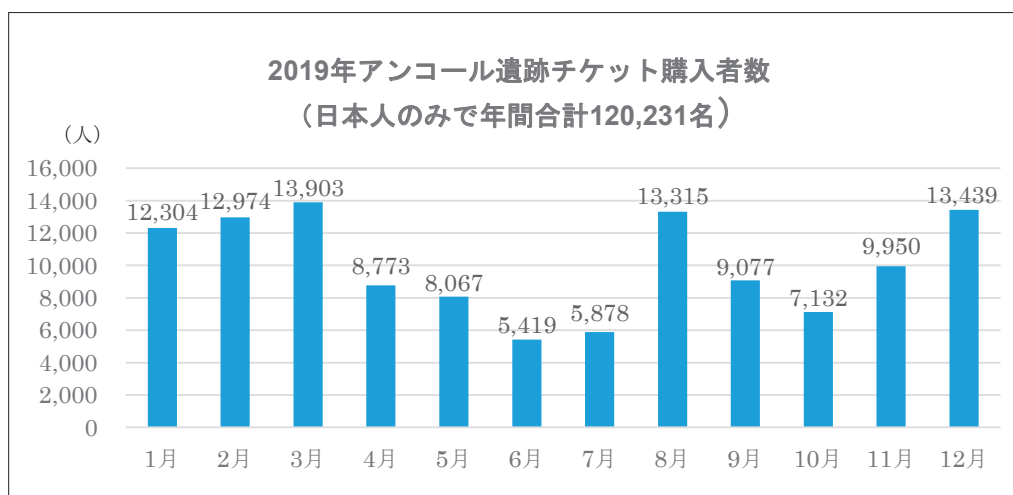


図27 日本人の2019年各月のチケット購入者数（アンコールエンタープライズ統計を基に筆者作成）

f) フランス人（購入者数：6位、入国者数：9位）

フランス人は安定的な傾向が見られ、遺跡訪問目的が6割以上である。旧宗主国としてアンコール観光においてももう少し存在感があると思われたが、意外と絶対数は多くはない。ただしコロナ禍の中では2月以降は常にチケット購入者数2位の立場を保っている点は非常に興味深い。安定した在住者がおり、文化への関心が高く家族連れなどでの訪問が増えたためと思われる。

年	2016	2017	2018	2019
入国(人)	150,294	166,356	170,844	164,117
チケット購入(人)	99,180	100,800	105,446	99,076
購入割合	66%	61%	62%	60%

図28

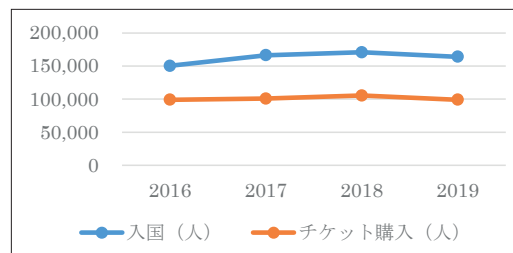


図29

g) ベトナム人 (購入者数：7位、入国者数：2位)

カンボジアと国境を長く接するベトナム人の傾向はここ数年非常に安定的である。

入国者数に比しアンコール観光に来る人数の割合は10%未満と低いのが特徴である。10年ほど前に入国者が急増した頃、アンコール・ワット前で急にベトナム語が聴こえる割合が増えたことを記憶している。

年	2016	2017	2018	2019
入国(人)	959,663	835,355	800,128	908,803
チケット購入(人)	68,496	65,675	66,645	66,586
購入割合	7%	8%	8%	7%

図30

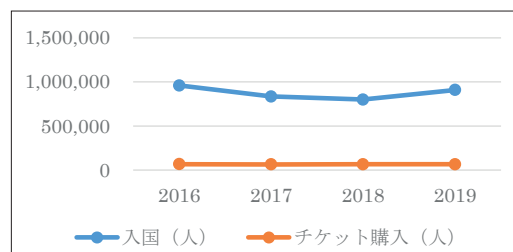


図31

h) タイ人 (購入者数：10位、入国者数：3位)

タイとカンボジアの政治的な関係は、しばしば往来者数に影響する。近年両国の関係が比較的安定していることから、タイからの入国者数は過去10年で急増している。一方で遺跡観光においては減少傾向にあるものの一定数を確保している。

年	2016	2017	2018	2019
入国(人)	398,081	394,934	382,317	466,493
チケット購入(人)	85,809	67,335	65,947	52,695
購入割合	22%	17%	17%	11%

図32

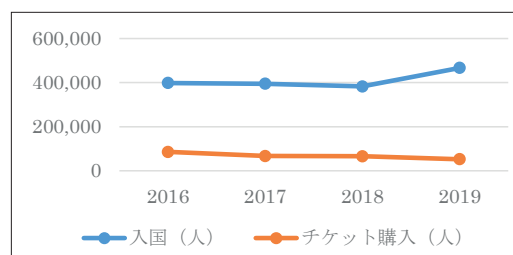


図33

i) ラオス人 (購入者数：50位、入国者数：4位)

ラオスからの入国者数は過去10年で急増した。一方でアンコール遺跡観光する人の割合は1%未満

年	2016	2017	2018	2019
入国(人)	369,335	502,219	426,180	363,951
チケット購入(人)	1,857	1,881	880	1,274
購入割合	0.50%	0.37%	0.21%	0.35%

図34

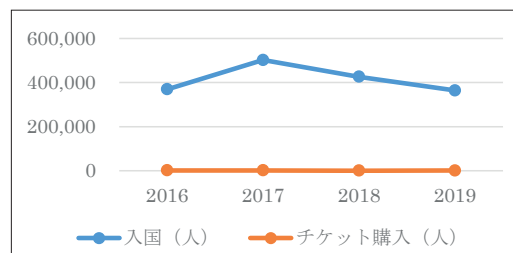


図35



写真1 世界文化エキスポの両国（カンボジア、韓国）マスコット（2006年11月）



写真2 ベトナムからのバス（2013年2月11日）



写真3 プノンペンの中国資本による高層ビル（2019年4月6日）



写真4 シアヌークヴィルのライオン像の背後には大型ビルが建設中（2019年3月10日）



写真5 1999年以前の券売所（2016年4月8日）



写真6 1999～2016年3月までの券売所（2016年4月8日）



写真7 2016年4月以降の券売所（2016年4月8日）



写真8 券売所（左）と北朝鮮の博物館（右）（2016年4月8日）

満と極小である。これは経済的事情を反映しているだろうし、国境周辺でのビジネス目的の入国ではないかと考えられる。先に述べたベトナム人、タイ人の例とは大きく異なる点である。

《各種入場チケット》

写真9 遺跡チケットの変遷



A 観光省発行（1995年7月6日付）、狐塚芳明氏提供



B ソカ・ホテル発行（2015年7月5日付）、原田ゆか氏提供



C 値上げ後の遺跡チケット
アンコールエンタープライズ発行（2017年2月9日付）、横須賀愛氏提供

写真10 遺跡入場パスの変遷



A アンコール保存事務所発行
（有効期間：1999年3月4日～同年12月31日）



B アプサラ機構発行
（有効期間：1999年7月12日～2000年7月12日）

写真11 遺跡入場カード



アンコールエンタープライズ発行
（有効期間：2020年5月17日～同年11月17日）、
加藤大地氏提供

3. シェムリアップにおける新型コロナウイルスの影響

カンボジアにおける1人目の感染者が確認された1月27日から8月までの感染者数累計をグラフ化すると図36のとおりとなる。詳細の事情を度外視し3月後半を第一波とすると、次に7月後半から8月前半を仮に第二波とする二度に区分できる感染者の増加時期があったことが分かる。少なくとも国内において感染が確認された感染者数の統計からはそのように読み取ることが自然である。8月31日現在の国内における累計感染者数は274人とどまり、死者は出ていない。また感染者のうち9割以上が国外からの入国者であり、市中感染は起きていない。公式発表における統計的事実を見る限り、カンボジア国内における新型コロナウイルスの感染予防対策は結果としてこれまで成功しているといつてよい。このことを念頭におき、1月からの国内の状況につき、以下シェムリアップの事例を中心に振り返ってみたい。

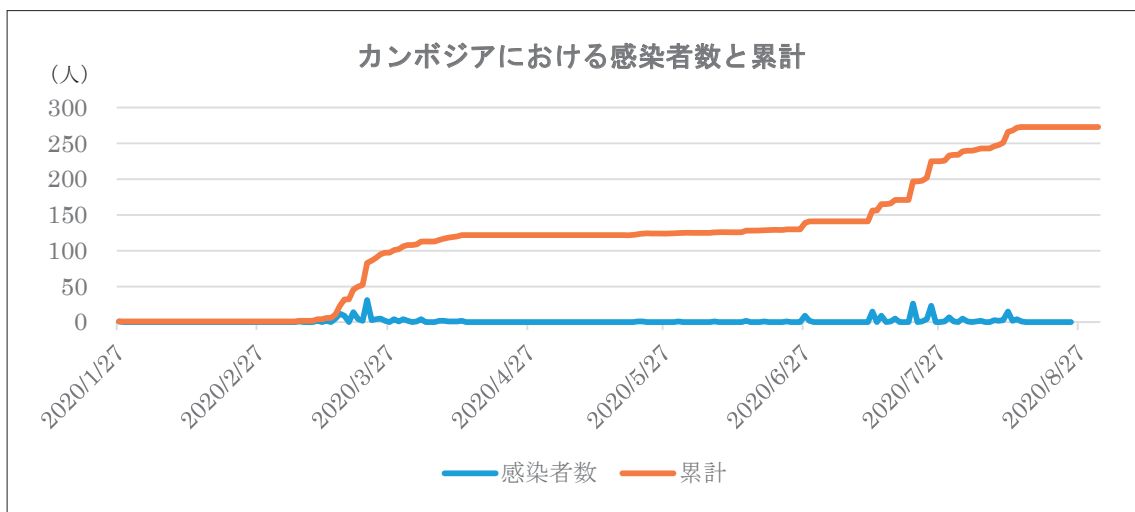


図36 カンボジアにおける感染者数とその累計

カンボジアにおいては1月末より世界各国同様に新型コロナウイルスの影響を受けている。3月以降は研究者の入国も実質的に難しくなり、国外よりカンボジア国内の正しい状況を把握することが困難になったと考えられる。そこで本稿ではカンボジアのとくにシェムリアップにおける新型コロナウイルスの影響を具体的に記録することで、後世の検証に資することを意図したい。

3-1. 国内の感染者発生状況

a) 初期：1月27日～3月6日（感染者1名でその後変化なし）

カンボジアにおける最初の感染者は1月23日に武漢から直行便でシアヌークヴィル入りした中国人男性で、27日に陽性が判明した。中国国内では1月23日に武漢が都市封鎖された。カンボジア国内では、その後39日間は新規感染者は確認されなかった。この間フンセン首相は訪中し、2月5日には北京で習近平主席と面会するなど、政府として大きな危機感を持っていなかったことが伺える。2月13日には各国で寄港を拒否されたクルーズ船ウエステルダム号がシアヌークヴィル港に入港し、翌14日には一部乗客の下船を許し、フンセン首相がマスク未着用で迎えるなど、世間を驚かせた。しかしその後も感染者は確認されず3月を迎えた。3月3日にシェムリアップ

を發ち日本（名古屋）に帰国した日本人男性の陽性が翌4日に確認されたことでカンボジア国内、とくにシェムリアップでは緊張感が一機に高まった。筆者の肌感覚ではこの日以降カンボジア人の意識が変化し始めた。つまり外国人に対し警戒心を示し始めた印象がある。

b) 第一波の感染拡大期：3月7日～4月12日（第一波122人目感染まで）

国内1人目の中国人男性の陽性が確認されてから40日後、3月7日にカンボジア人初の陽性（国内陽性2人目）が確認された。この男性が先に帰国し日本で陽性が確認された日本人の濃厚接触者であったことより、日本人男性より感染したと考えられる。

アンコール・ワットのあるシェムリアップ日本人社会においては大きな衝撃となった。またこれを契機としてカンボジア政府もこれまでの比較的緩い対応から舵を切り、首都プノンペンとシェムリアップ市の学校を即休校とし、4月13～16日のカンボジア正月に際して予定されていたアンコールソクランのイベントの中止を即決した。この時の政府の対応は非常に機敏なものであったことを特記しておきたい。3日後の3月10日には西参道の修復作業員の出勤管理における指紋認証は感染予防の観点より停止され、写真撮影に切り替わった。同日某スーパーでは体温検査で37度以上で入店を拒否、マスクの価格上昇、コメの買い占め、という状況が観察された。

3月11日にはWHOがパンデミックを宣言した。3月15日頃から感染者が急増し、16～22日の1週間に二桁増の日が3日間あった。3月16日には全国において学校が閉鎖された。3月17日からはイタリア、スペイン、ドイツ、フランス、アメリカからの入国が禁止され、翌日にイランも追加された。17日には全国の娯楽施設（カラオケ、クラブ、ディスコ）や博物館に対しても閉鎖命令が出された。3月22日にシアヌークヴィルにおけるフランス人の集団感染による31名の新規感染者増で1日当たりの最大数を数えた。累積感染者数が10名を超え11名となった3月15日から、累積感染者数が100名を超えた28日までわずか13日間であった。30日からは到着ビザ、Eビザ、観光ビザの発給が停止され、31日からは陰性証明がないと入国できない措置が取られるなど、3月後半はめまぐるしい動きがあった。

c) 感染安定期：4月13日～5月16日（第一波感染者全員の陰性確認まで）

4月13日以降は新規感染者が出ないまま1カ月が経過した。5月16日には、患者の全員が治癒・退院し、国内に陽性者が1人もいないことが発表された。特筆すべき事項として、多くの患者がその後治癒し死者が1名も出ていないことが挙げられる。隣国のベトナムでも死者は長らく発生しなかったし、ラオスでは現在まで死者は出ていないことから、何らかの共通する環境条件の影響があるのではないかと考えられる。本件については今後科学的な検証が行われ、その理由が明らかになり新型コロナウイルスの予防対策への貢献となることが期待される。

d) 感染第二波への警戒期：5月17日～7月前半（国内陽性者ゼロ以降）

国内における陽性者がゼロとなって後、5月21日には海外からの帰国者から陽性者が見つかると、その後週に1人程度のペースで陽性者が確認され、7月前半までは散発的に感染者が見つかる状態が続いた。この間、感染者のほぼすべてが海外からの帰国者であり市中感染は起きていないと考えてよい。この事実より国内における新型コロナウイルスへの警戒感は弱まり、6月以降マス

ク着用者の数は激減し、市民生活はほぼ平常通りという状態となっている。

e) 感染第二波的傾向を示す時期：7月後半から8月前半まで

7月後半から感染者の確認数が増えた。ただしその大半は海外からの帰国者であった。カンボジア政府は感染者の確認数の多いインドネシアとマレーシアからのフライト受け入れを8月1日から停止した。8月13日からはフィリピンからのフライト受け入れも停止している。その後カンボジア政府の決定により、正月休みの代休として8月17日～21日までの5日間は連休となった。前後の週末を含めると最大で9連休となり、カンボジア版 Go To キャンペーンの様相を呈した(写真31)。観光省発表によると、8月17～21日までの5日間に国内においてカンボジア人約140万人が移動した。このことで国内における感染拡大が心配されたが、そのような報道は目に見えない。

3-2. アンコール遺跡群の観光への影響

外国人旅行者については、遺跡チケット販売の統計を詳細に見ると、1月末からの減少傾向がはっきりとわかる。チケットの購入者数は図16にあるように新型コロナウイルスの影響で2月以降激減し、4月(654人)に底(写真18～20)をついた後も、5月(1,776人)、6月(1,747人)、7月(1,790人)と通常に比し99%減の状況で低値安定となっていることがわかる。今後については、国際線の再開状況にもよるが、タイやベトナムなどの近隣諸国や世界の感染状況を見る限り、劇的な変化や改善は見込めないと考えられ、当面恐らく年内はこの状況が継続するものと予測される。

4～7月に共通していえることとして、99%減の状況下においてもなお、中国人がシェア第1位であり、フランス人が第2位である点は興味深い。両国とも国内の在住者の訪問が多いと思われる。実際アンコール・ワットにいくと、4月や5月には中国人数名のグループ(写真24、26、28、29)による遺跡見学が行われていたことを実見している。フランス人の場合は、小さなお子さんを伴う夫婦による観光などの事例(写真30)が散見された。

アンコールエンタープライズは5月22日に在住外国人向けに半年間200ドルというパス(写真11)を発行する旨を公式に発表した。一日券37ドルでは高すぎて遺跡へ行かなかった在住者の中には、このパスを購入して、遺跡に頻繁に通う人が増えた。

一方でカンボジア人の参拝者については、入場無料であることから正確な統計はないが、3月末の約1週間は、遺跡から人の姿が消えた。外国人だけではなく、カンボジア人が恐れをなして外出を控えたのである。西参道前は静まり返り、西参道の終点付近ではいつもは見かけない鳥が羽を休める姿が見られた。3月25日午後3時頃にアンコール・ワットの内参道を撮影した写真がある(写真12)。本来であれば夕日を見る時間帯であり、混みあっているべき内参道に人の姿はなかった。しかもこの時はとくに人が居なくなるのを待つ必要もなく、人の居ないアンコール・ワットを撮影することができた。この光景は1993～4年頃の1年間に1～2.5万人の外国人が訪問していた状況が再現されたようで極めて稀な光景であった。

西参道の修復工事については、この間支障なく進めることができた。修復工事のために一時的に通行止めの措置をとっている西参道には作業員が30～40名ほどいた。一方で通常であれば多く

の観光客が通行するはずの仮設の浮き栈橋には人の姿が見えなくなった。ただし外国人の観光に際してのチケット販売とチェックの業務は、一時も中断されることなく継続されたことを明記しておきたい。

3-3. カンボジア人の新しい動き

3月末に遺跡から人の姿が消える一方で、少数の若者たちはアンコール・ワットやバイヨンで自撮り写真（写真14、15）に興じ、恐らくSNSにアップしたと思われる。その後4月（写真18、19）に入ると、外国人の姿は消えたままであったが、一部のカンボジア人が、三密を回避できる場所として、遺跡を訪れるようになった。カンボジア人の家族連れが数名から10名以上の単位でアンコール詣でをする姿が多く見られるようになった（イメージ写真25）。他方、自転車に乗り遺跡地域を訪れるカンボジア人（写真21、23、27）がこの頃から急に増えていった。この傾向は正月に一度ピークを迎え、その後再度下火となったものの、大きな傾向としてはその後も増え続けていった（写真22、25）。当初は男性中心の自転車ブームであったが、その後5月になると若い女性ら（写真23）が自転車に乗る姿がみられるようになりブームは急激に加速していった。6月に入り、新型コロナウイルスの影響の長期化がわかってくると、旅行業界は国内需要の開拓に向けて舵を切り始めた。その一つは郊外のクーレン山でのキャンプなどのアウトドアであった。

3-4. 市内の様子

WHOがパンデミックを宣言した3月11日頃より国内の緊張感は高まって行った。カンボジア人は新型コロナウイルスを極度に恐れ、自主的に不要不急の外出を控えるようになった。同時に食品デリバリー業が急伸し、パンダなどの配送バイク（写真16、17）が市内に目立つようになった。本来であれば夜に最も外国人旅行者が集まるパブストリートは、3月末から4月にかけて漆黒の闇と化した（写真13、20）。

4. 新型コロナウイルス感染状況のカンボジアとアセアン+3の比較

8月27日現在におけるアセアン+3諸国の感染状況²⁰⁾を表にすると図37となる。

フィリピン、インドネシア、マレーシアの感染者数は5桁となっており非常に多い。しかし6万人近い感染者がいるシンガポールの死者数が27名と極端に少ないのは何故だろうか。

その一方で、ミャンマー、カンボジア、ブルネイ、ラオスの感染者数は3桁以下と少ない。カンボジアとラオスは現在まで死者が出ていない。ベトナムも7月30日以前までは死者ゼロであった。

各国の人口、国土面積、気候、生活、宗教などの違いにより感染諸状況に差異が生じると考えられ、これらを科学的に分析することは今後の感染対策に寄与するであろう。また一方で医療体制、検査数の違いも統計に大きく影響すると考えられる。当然ながら情報管理などの体制は実態をどこまで正確に表しているかに決定的に影響を及ぼす。

カンボジアにおいては、感染の爆発的な拡大がなぜ起きていないのだろうか。第一に、家庭や会社、店舗におけるエアコンの普及率が低く、「密閉」という状況が生まれにくい。巨大なデパートなどもそれほど多くは存在しないし、国民の一定層以外は利用しない。移動も密閉状態を生

む電車やバスではなく、自家用車やバイク、自転車あるいはトラックの荷台などで通気性の良い環境が多い。第二に国外から入国する外国人が主たる初期の感染源と仮定すると、一般に外国人と地元民は買い物や食事においても、大きく趣向が分かれており、交わる率が少なかったことが考えられる。第三に国土面積に比し人口が少なく、人口密度が低いことで「密集」が生まれにくい。第四に人口構成比をみると、症状が現れにくい若年人口の割合が多く、重症化しやすい高齢人口が少ないことがある。第五に、新型コロナウイルスが高温多湿や紫外線に弱いと仮定するとカンボジアでは半屋外の生活者が多く、ウイルスが長く生存しにくい環境であったかもしれない。第六に、カンボジア政府は3月7日以降は対応が素早く全国の学校やカラオケ、運動施設などを早期に閉鎖し、措置を徹底したことで、感染原因を減らすことに成功したことが考えられる。第七に、カンボジアにおいては「本当は感染爆発が起きていて、検査数が少なく把握できていないか政府が隠蔽しているのではないか」という懸念を筆者や一部のカンボジア人は当初から抱いていた。しかしながら「原因不明の死者が出た」などの噂もなく、必ずしもこれを疑う根拠はむしろないと今は考えている。

アセアン諸国で感染が爆発した国々についての詳細で正確な知見を持っていないが、例えばインドネシアやマレーシアでは宗教行事に由来して感染者が爆発的に拡大した可能性が高い。またシンガポールにおいては密集して暮らす労働者が感染拡大の温床になったといわれている。ベトナムで感染者や死者が少ないのは、ごく初期より政府による厳格な対応をとったからではないか、と考えられる。

	国名	感染者数	世界順位(感染者数)	死者数	回復者数
1	フィリピン	202,361	22	3,137	133,460
2	インドネシア	160,165	23	6,944	115,409
3	中国	85,004	35	4,634	80,044
4	日本	66,453	44	1,252	53,482
5	シンガポール	56,495	46	27	54,971
6	韓国	18,706	74	313	14,461
7	マレーシア	9,291	89	125	8,978
8	タイ	3,404	120	58	3,237
9	ベトナム	1,034	159	30	632
10	ミャンマー	580	167	6	345
11	カンボジア	273	181	0	264
12	ブルネイ	144	189	3	139
13	ラオス	22	202	0	21
	アセアン+3 合計	603,933		16,529	
	世界合計	24,176,836		825,696	
	世界の中での割合	2.5%		2.0%	

図37 アセアン+3の感染状況（8月27日14時更新 NHK 特設サイト）

5. まとめ

5-1. アンコール観光の動向

2013年以降常に年間200万人以上の外国人が遺跡チケットを購入し、カンボジア人を含めれば、恐らく少なくとも年間300~400万人の観光客が毎年アンコール・ワットを訪れている。訪問者の合計は、平均で1日1万人前後、宗教行事等で訪問者が多い日には1日2万人以上が訪れている

と推測される。

2020年の新型コロナウイルスの影響によりこの構図は大きく崩れた。ウイルス問題の終息とともに外国人観光客の客足は回復すると考えられるが、原状回復には少なくとも数年単位での時間が必要なことが徐々にわかってきた。

他方でこの20年間カンボジア人の観光客数は一貫して伸びてきた肌感覚がある。国内のインフラ整備が進み経済事情も好転してきたことにより国内を大移動してアンコール・ワットを見ることはすでにこの10年来の一つの流行となっている感がある。

今回の新型コロナウイルスの問題に際しては、感染源と認識されている外国人訪問者が減ったことや、三密を回避できる感染の恐れが少ない屋外の遺跡であること、学校が休校となり子供たちが時間をもてあましたこと等がカンボジア人のアンコール・ワット行きを後押ししたと考えられる。若者たちがSNSにアップする画像や動画などがこの動きをさらに加速させていることは間違いない。今後も引き続きこれまで以上のカンボジア人がアンコール遺跡群を訪問することになる。カンボジアの国旗に描かれる文化遺産を多くの同国人が訪問することは大変に喜ばしいことといえる。祝祭日や連休など特定の期間に大挙して訪れる場合の許容収容人数には一定の限界があると思われるので、管理者であるアプサラ機構はその対応を念頭に取り組むことが今後さらに求められるであろう。

筆者はカンボジア日本人会シェムリアップ支部の企画として7月25日（土）17：30～18：30にアンコール・ワット前から生配信（無料）を行った。第3回オンライン交流会「アンコール・ワット生配信～上智大学三輪悟が遺跡を語る」というタイトルで、アンコール・ワットの夕景をライブで配信した。この時ライブで約110名が同時視聴し関心の高さが伺われた。その後8月1日（土）にはJTBとHISがオンラインツアー（有料）を配信し、その後旅行各社はコロナ禍の中の新しいビジネス展開の可能性に邁進していった。

5-2. ポストコロナのアンコール観光

新型コロナウイルスの影響によって、外国人観光客の受入れを前提としたアンコール観光に大きく頼ってきたカンボジアの旅行業界は大きな打撃を受けている。当初夏か秋には回復するだろうとの短期終息を見込んでいたがこれは見当が外れた。世界における現在の感染状況を見る限り、ワクチン開発が進み感染抑制に成功し、経済的な裏付けを確保し安心安全な海外旅行が再開されるまでには年単位、あるいは数年単位での時間を要すると今の時点では考えざるを得ない。

今回の危機に際して、ポストコロナのアンコール観光という観点において考慮すべき点をいくつか挙げたい。

a) 国内需要の喚起

外国人観光客のみに頼る従来の方式を改め、カンボジア人の富裕層を含めた国内需要を見直す好機と考えてみる。コロナ禍の中で、カンボジア人の潜在的需要が想像以上に大きいことがわかった。カンボジアは内戦からの復興を遂げ経済的に豊かになったことは疑う余地がない。次に心の豊かさを求める動きが出ており、コロナ危機を契機として国内需要発掘をさらに進めるべきである。

b) カンボジア人の入場有料化

アンコール遺跡群の入場料金徴収方式を改め、これまで無料で入場してきたカンボジア人からも一定の料金を徴収できる方式を模索することが必要と考える。現代の仏教寺院が境内にあり、現在の信仰の場としての位置づけも大きいことから、課題があることは承知している。少しずつ議論を深め、時間をかけてでも有料化を実現すべき時が来ている。自国民の信仰心（=寄進する心）を考慮すれば、有料化の実現は必ず成功すると考えられる。安定的な入場料金収入が遺跡の保全に資することを国民に分かりやすく提示することが不可欠である。

c) リスク分散の観点

2019年のカンボジア入国者数は660万人を超え、うち4割弱の240万人が中国人であった。アンコール観光におけるチケット購入者全220万人のうち、4割の87万人が中国人であり、他の国籍者を大きく引き離し圧倒的多数を占めている。このことから近年のホテル、レストラン等は中国人対応を重視する傾向が進んだことは周知の事実である。しかしながら、先に示したとおり近年中国人入国者に占めるアンコール観光者の割合は大きく減少する傾向にある。一方で日本人や西洋人旅行者は中国人観光客が増えた現状を嫌い、結果としてアンコール観光の人気低下につながっている可能性を否定できない。カンボジア政府や旅行業関係者はこのことを十分に承知の上で、長期戦略を持ち中国人マーケットに対応すべきである。少なくとも中国人に特化したビジネス一辺倒ではリスク集中が過ぎてあまりに危険である。

d) 年間を通した平均的需要の確保

カンボジアの気候条件が雨季と乾季で大きく異なることから、繁忙期と閑散期に二分化されることは周知の事実であり、ある程度はやむを得ない。各国の学校の休みに合わせて学生旅行者が増えることは世界共通の事情ともいえる。今後の国内需要を考えると、カンボジアの祝祭日に合わせた突発的な需要の増減が考えられるが、これをいかに年間を通じた平均化したものにするかを考えることに努めたい。2019年の遺跡チケット購入者数の事例をみると、最大の2月（273,259人）と最小の9月（110,677人）では約2.5倍の開きがあり、ホテルやレストランにおいて従業員の安定した雇用確保が難しい状況にある。

e) 遺跡入場収入が遺跡保全に資することの可視化

2017年のチケット料金の値上げを機に、アンコール遺跡チケットの年間売り上げは3年連続で日本円で100億円を超えた。現状この収益が直接的に遺跡管理に貢献しているかどうかは一般人の目にはわからない。今後カンボジア人の有料化も念頭にもう少し遺跡への貢献を可視化することで、現状の高い入場料金に対する支持意見の醸成が必要になってくるのではないだろうか。2017年の値上げに際してジャヤヴァルマン7世両院への強制寄付がチケット1枚当たり2ドル付与されたが、このくらい分かりやすい可視化が良いと思われる。

f) オンラインツアー

コロナ禍とその長期化の深刻さを認識した旅行各社は、6月あるいは7月以降こぞってオンラ

インツアーの可能性を模索し、目新しさもありその一部は成功しているように見える。コロナ禍が継続する間は、形式を発展させながら今後も続くと思われる。またコロナが終息した後もオンラインツアーは一定の割合で継続し、実地ツアーと共存するものと考えられる。

追記

本稿は2020年8月末までの状況を基に記し、その後に発生した事象は反映していない。ハンガリー外相がカンボジア出国後のタイで陽性と判明し、接触者が感染した11.3事案や、初の市中感染となった11.28事案などは項を改めて書きたい。



写真12 人の居ないアンコール・ワット（3月25日）



写真13 電飾の消えたパブストリート（3月28日）



写真14 バイヨンでセルフィーに興じる若者（3月29日）



写真15 家族連れ（3月29日）



写真16 フードパンダ配達バイク（4月3日）



写真17 ニャム24配達バイク（8月20日）



写真18 人の居ないアンコール・ワット（4月7日）



写真19 閉じたバンテアイ・クデイ内土産物屋（4月7日）



写真20 電飾ゼロのパブストリート（4月8日）



写真21 遺跡へ向かう自転車の若者（5月3日）



写真22 人の出が増えつつあるアンコール・ワット（5月5日）



写真23 トムへ向かう自転車（5月16日）



写真24 中国人観光客（5月16日）



写真25 増えるカンボジア人観光客（5月18日）



写真26 ガイド付きの中国人観光客（5月30日）



写真27 カンボジア人の自転車の団体（6月5日）



写真28 久しぶりに見た大型バス（6月6日）



写真29 カンボジア人学生を伴う中国人団体（6月6日）



写真30 幼子をつ連れる西洋人カップル（6月24日）



写真31 正月代休に込み合うパブストリート（8月21日）

註

- 1) 2018年トリップアドバイザーによる「Travelers' Choice® awards for the best landmarks in the world」で第1位となった。
<https://www.tripadvisor.com/blog/best-world-landmarks-famous-attractions-travel-bucket-list/>
- 2) アンコールエンタープライズ公表の統計による。
- 3) カンボジア観光省公表の統計（2020）による。
- 4) 日本大学理工学研究科（修士課程1年）在学中であった1997年10月20日～12月20日まで、指導教官の片桐正夫教授に誘われて上智大学アンコール遺跡国際調査団（団長：石澤良昭教授）建築班のアンコール・ワット西参道調査に初参加した。その後修士課程在学中に計6回の現地調査に参加し計約260日間現地に滞在した。

- 5) 筆者は京都大学東南アジア地域研究研究所のウェブサイトにて5月29日付で「新型コロナウイルス—カンボジアの事例—」と題して寄稿し、カンボジアのシェムリアップにおいて5月までに観察された事象について比較的细节を記している。
<https://covid-19chronicles.cseas.kyoto-u.ac.jp/post-048-jp-html/>
- 6) 本稿ではカンボジア観光省が2003～2020年までに作成した18年間分の統計を参考にした。入手した範囲においては1998年以前に關しての国籍別のデータを見つけられなかった。
- 7) 手元の統計資料による。ただし伸びが大きすぎて不自然だと感じる。入手したデータに誤りがある可能性があることを記しておきたい。
- 8) アンコール—慶州（キョンジュ）世界文化エキスポは2006年11月21日から2007年1月9日にかけてシェムリアップの60m 道路北側（現在の遺跡チケット販売所周辺）にて開催された。
- 9) Cambodia Daily 紙（2007年10月10日付）による。
- 10) カンボジアとベトナムは2008年11月4日に二国間のビザ免除協定を結び、同年12月5日より発効した。
- 11) カンボジア国内には少なくとも8カ所の中国が建設した水力発電施設がある。2012年にはポーサート州に建設中の Stung Atay Dam 工事中に死亡事故が発生した。また2015年9月にはカンボート州の Kamchay Hydropower Dam の緊急放流による洪水被害の事例がある。現在カンボジア国内の消費電力の約4割を水力発電に依存するが、2019年は水不足により十分に発電ができなかったことから電力不足に陥り国内各地で停電が多発するという事態もおきており、安全面や環境問題なども含め解決すべき多くの問題を抱えている。
- 12) 首都プノンペンとシアヌークヴィルを結ぶ総長190kmの高速道路の建設工事が2019年3月に始まっており、4年間の工期で完成する予定。
- 13) シアヌークヴィルは首都プノンペン市民が週末や休日に日帰りや宿泊を伴い訪問する行楽地として長年一番人気の場所であった。近年の中国人の増加に伴い、物価高騰や治安の悪化を受けて、カンボジア人が「あそこには行きたくない」と公言するようになった。
- 14) アプサラ機構とソカ・ホテルは、1999年4月22日同意書に署名し、総収入の額に関わらず、ソカ・ホテルはアプサラ機構に年間100万米ドルを支払うことになった。2001年1月1日からは総収益が年間300万米ドルを超えるとアプサラ機構に70%、それ以下だと折半することになった。
- 15) カンボジアの観光省と財務省から成る組織。当初アプサラ機構も入るとの話もあったが、結論としては除外された経緯がある。
- 16) 2006年11月21日にアンコール—慶州世界文化エキスポ開会式が開催された。韓国のノムヒョン大統領とカンボジアのフンセン首相が出席し盛大な開会式を行った。式の演出としてアンコール地域の観光用の象が出演し、カンボジア空軍のパラシュート部隊が会場に降下するなど、筆者の知る限り過去20年間におけるシェムリアップ開催のイベントとしては最大規模であった。このイベントにちなんでこの地区に「キョンジュ」という愛称がついた。愛称はシェムリアップの地元民に広く知られているが、愛称の由来についてはほとんど知られていない。
- 17) 2016年12月4日に落成した博物館。北朝鮮が2,400万ドルを拠出して建設された。国連の制裁決議と関連し、館入り口の掲示によると2019年11月25日から閉館となっている。
- 18) 1999年3月にスイス人の医師 Beat Richner 氏により建設された子供病院。15歳以下の子供は無料で診察を受けることができる。シェムリアップ州のみならず近隣の他州からも多くの子供が診察を受けにくる。創設者の Beat Richner 氏は2018年9月に亡くなった（享年71歳）。
- 19) アンコールエンタープライズ統計によると、2017年2月から2020年3月までに7,350,811人分、合計14,701,622ドル（日本円で16億円超）がジャヤヴァルマン7世病院への寄付として扱われている。
- 20) 8月27日付NHKニュースサイトに掲載されている統計より。<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/world-data/>